

# NEWS

## ● 教室関係

### § 41年度の地理学科(学部)講義科目は次の通りである

地理学概論 4 渡辺	地理学本質論と発達史
日本地誌I 3 前 渡辺	日本の概観と北海道・九州の地誌
経済地理学 3 松井	日本と世界の農業経済地理
集落地理学 3 前 松井	集落と自然、形態、機能的結合など
外国地誌III 3・4 松井	ソビエト連邦の地誌
日本地誌II 3・4 前松井	日本の農業地域
気候学II 3・4 前松井	気団 高気圧 低気圧など
地理学特講 3 前 松井	那須野盆地の地誌
気候学 1 浅海	世界の気候型分類と気候区分
土壌学 1 浅海	世界及び日本の土壌型分類と土壌区分
地理学演習II 独書講読 3	浅海 ヘットナーの地誌、最近の論文の輪読
地形学 2 式	侵蝕地形 地形輪廻 構造地形など
日本地誌I 3 後 式	本州・四国の地誌
地図学演習 2 式	地形図の計測、地形判読・分析の方法
写真地理学 3 後 式	空中写真測量の知識と判読など
地図学 1 後 正井	作図・読図の技術と知識、地図投影法
地理学演習I 英書講読 2 正井	Finch & Trewartha の Element of Geography の講読
地理学特講 3 後 正井	都市の発達・立地・形態・機能など
地理調査法 3 後 正井	野外・文献調査の基本的技術・知識
地理学演習III 3・4 全員	
歴史地理学 3・4 前 別技	歴史地理学の諸問題
交通地理学 3 後 有末	交通の概念、機能、発展、交通論の生成
地理学特講 3 前 幸田	工業経済地理学
地理学特講 3・4 前 福井	日本の気候誌
地理学特講 3 後 保柳	中国本土の自然環境と人間生活

地理学特講3 後 村越

外国地誌 I 2 浅井 ヨーロッパの自然および歴史

§ 一般教育・教職課程

地学 I前 式 重力・地震・火山・岩石・地層・地史など地学的現象の概観

地理学 I後 斎藤(非常勤講師) 主要自然地域と文化地域の概観

社会科教育法 III前 大和田

§ 地理学, 野外巡検予定(1966年度)

担当教官	期 間	場 所	対象学年
渡辺教官	10月10~13日	紀伊半島	2年生
松井 "	10月	那須野	3年生
浅海 "	3月or4月, 1967年	未定	2年生
式 "	3月 1967年	未定	3年生
正井 "	1月or3月, 1967年	未定	1年生

§ 卒論フィールド(41年度)

卒論の提出期限は12月24日であり, フィールド・ワークは主に夏休みが当てられる。夏休み前後の教育実習と相まって4年生には年末までひどく忙しくなる。

4 年 生	フィールドの場所	主な内容
伊 藤 敦 子	岩手県盛岡市近郊	農業土地利用の変遷
江 橋 晴 子	長野県伊那谷北部	信州ロームと地形面農業土地利用
川 中 豊 子	新潟県小千谷市北半	地回り地域
熊 谷 恭 子	神奈川県多摩丘陵南部	都市化
児 島 淑 子	和歌山県有田川下流域	ミカン栽培
鈴 木 みやこ	長野県松本盆地南部	ブドウ栽培, 地形面
野 口 文 子	群馬県大間々台地	地下水と集落
橋 本 直 子	静岡県奄原山地	地回り地形, 農業地域区分
畑 野 邦 子	大阪府貝塚市周辺	綿・スフ工業
英 勢 都子	香川県土器川扇状地	溜池農業
星 野 美津子	長野県松本盆地北部	地形区分・丘陵地の農業
山 崎 民 子	岩手県久慈地方	海岸段丘, 気候と農業

## § 大 学 院

本年発足の大学院（修士課程）は4月27、28日の入学者選考試験の結果、本学地理学科出身の馬場由美子さん、林原陽子さんの2名が入学した。（定員は6名）人文科学研究科としての入学者は、合計27名である。

入学式は5月10日、12日から開講された。本年本学科の大学院学生は前期は専門講義を受け10月（後期の始まり）になって、研究題目を決めた上、講座別に所属することになる。現在開講されている科目と本年度中に行われることが決まっている科目は以下の通りである。

地誌学演習	渡 辺
地域特論 前	松 井
自然地理学演習 前	浅 海
地誌特論	式
人文地理学演習 前	正 井
文化地理学特論	後 別 技
地形学特論	後 岡 山

## § 講 座 の 体 制

大学院発足に伴って教室の研究、教育の体制が明確に講座制をとることになった。以前から講座の呼称はあったが、習慣的な内部規定であった。現在の教官の配置は下記の如くである。

人文地理学講座	松井 勇 教授	正井泰夫助教授
自然地理学講座	浅海重夫助教授	岡崎セツ子助手
地誌学講座	渡辺 光 教授	式 正英助教授 貝山久子助手

なお、渡辺教授の学部長事務を扶けるため、本年卒業生の高田和枝さんが教務補佐員に就任、同じく細井玲子さんが、写真判読研究のため研究生（式助教授指導）となった。

## § 関 係 教 官 学 内 役 職

渡辺教官 文教育学部長（1965年10月～1967年9月） 評議員、教務委員、教育実習委員、図書選定委員、予算委員、紀要編集委員、付属学校運営委員、幼教運営委員、施設計画委員、大学院委員。

松井教官 地理学科主任、4年生補導委員、図書館運営委員、図書選定委員。

浅海教官 1年生補導委員

式 教官 3年生補導委員、臨海学習施設準備委員、山岳部顧問教官

正井教官 2年生補導委員

## ● 日本地理学会

日本地理学会春季大会は、4月1日～6日まで開催された。1. 2. 3日には立正大学において自然関係41. 人文関係60の研究発表が行なわれた。4. 5. 6日のエクスカージョンは3班に分れ、各々新潟新産業都市、利根、吾妻両河川地域の産業と地形及び天竜川中、下流域の開発についてその成果をあげた。また総会では、「日本における地誌の伝統と思想的背景」について、石田竜次郎（一ツ橋大、教授）新会長演説があった。

例会は、6、7月は東京にて開催されまた5月は金沢において石川地理学会と共催で行なわれた。学会では、本年度は例会を原則として第2土曜日午後1時半より開催することに決めた。本年度の開催予定日は以下の通り。10月8日（土）、12月10日（土）、1月14日（土）、2月11日（土）、3月11日（土）。

秋季大会は人文地理学会と共催し、11月3日から6日まで大阪市で開催する予定。会場は大阪市立大学文学部など。日程は11月3日（木）一般発表、4日（金）特別発表、5日（土）、6日（日）エクスカージョンである。エクスカージョンは、近畿地方の地形・淡路地方及び南播州地方の三班が予定されている。

## ● 第11回太平洋学術会議

第11回太平洋学術会議（PSC）は、8月22日より3週間、日本で開催される。第1週は、東京大学においてシンポジウム、第2週は専門部会の論文発表、第3週は日本各地で現地討議が行なわれる。

地理学関係のシンポジウムは以下の通り、（ ）内はコンピーナー（会議招集者）。№7、太平洋地域における都市発展の戦後の傾向（木内信蔵）、№8、土地分類（渡辺光）№54、農村地域の近代化（上野福男） №57、太平洋地域の土地自然の形成（中野尊正） №59、太平洋地域の気候（関口武）

本学関係者の同会議の発表者は次の通り、渡辺光：Intention of Symposium — Land Classification (Symp.№8). 浅海重夫：The Relationship of New Caledonia as related to Climate and Rock Types (Divisional Meeting) 式正英：Land clasification by geographers in Japan (Symp.№8). 正井泰夫：Urbanization of Japan: Present and Future. A world-wide view. (Symp.№7). (P53につづく)

る調べてDrも戴き、灌漑水温の形成機構を自然河川で実測するため、大井川の筏に何度も乗りました。今夏も白糸の滝に大学院の学生と行き、その水と空気との熱交換量を詳しく測る予定です。あの多量の水が一秒余りで1~2℃も昇温し、一方空気は1馬力のクーラー5000台分が働いたくらい冷却しているのですから。

北ヨーロッパで会った地形学者は誰も彼もその環境に則してか、周氷河地形と取組んでいます。するとさしずめ日本の地形学者は流水地形、とくに豪雨地形でも研究すべきでないかと強く感じます。私が今さら地形をやるのは無理としても、観測資料のない昔の豪雨量を、土石流地形などから何とか推定しようというのが私の新しい念願です。外国のあちこちの図書室で少しはその材料も集めましたがこの問題はこれからです。それには豪雨と土石流の現場を実見しなければ……。それには気象衛星の写真から集中豪雨の地点を見つけ、ヘリコプターで駆けつけなければ……。もしそれが可能ならエッサ2号の電送写真を捉えるAPT装置が、秋葉原あたりのジャンクで組立てられないものかしら?……。その構造や配線はどうなのだろうか……。と、今その専門家土屋清氏の講演を聞いたり、著書「気象衛星」を読み始めたりした所です。太平洋学術会議の雑用に追われながらこんな「真夏の夜の夢」も追いかけ、自分で自分のキリ無さに呆れているのが正に偽らない「近況」です。



### (P67よりつづく)

太平洋学術会議は12部門(気象・海洋・地球物理・地質・生物・農学・水産・医学・社会・人類・地理・学術情報と博物館)より成り、太平洋地域に関する科学問題の研究と平和を目的に、1920年(ホノルルで開催)以来ほぼ4年ごとに各国持ち廻りで開催されてきた。日本での開催は大正15年(第3回、赤木健先生出席、従って今回は名誉会員)以来2回目である。なお、渡辺光先生は、木内信蔵先生とともに第11回太平洋学術会議日本代表者にすいせんされ活躍されている。